

児童が主体的に学び合うことのできる 外国語活動の授業づくり

— 外国語を活用する場面を取り入れた学習を通して —

佐々木 佑樹¹

新学習指導要領実施に伴い、小学校高学年から外国語学習が教科化され、児童に主体的に学びに向かう姿勢を育むことがより求められる。そこで、児童の知的好奇心を刺激して興味を持てる題材を扱うとともに、単元の中の授業間のつながりを重視し、他者との関わり合いの中で外国語を活用する場면을繰り返し設定した。その結果、児童が外国語を使えたという達成感を得て、主体的に学びに向かう姿勢が高まるか検証した。

はじめに

小学校学習指導要領解説外国語編には、「グローバル化が急速に進展する中で、外国語によるコミュニケーション能力は、これまでのように一部の業種や職種だけでなく、生涯にわたる様々な場面で必要とされることが想定され、その能力の向上が課題となっている」（文部科学省 2017a p. 5）と外国語教育の必要性の高まりが示されている。小学校では平成 23 年度より第 5・6 学年で外国語活動が必修化され、年間 35 時間の授業が行われている。そして、平成 26 年度「小学校外国語活動実施状況調査の結果[概要]」では、英語を使って積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の向上や英語の音声に慣れ親しむことへの一定の成果が示された。一方で、小学校段階で「読む」、「書く」も含めた言語活動への知的欲求が高まった状況に、学習内容が対応していない点等が課題として挙げられた。

これらの成果と課題を受け、平成 32 年度の新小学校学習指導要領実施により、小学校学習指導要領解説外国語編では、「小学校中学年から外国語活動を導入し、『聞くこと』、『話すこと』を中心とした活動を通じて外国語に慣れ親しみ外国語学習への動機付けを高めた上で、高学年から発達の段階に応じて段階的に文字を『読むこと』、『書くこと』を加えて総合的・系統的に扱う教科学習を行うとともに、中学校への接続を図ることを重視することとしている」（文部科学省 2017a p. 6）と示された。併せて、授業時間数も、高学年では、年間 35 時間から 70 時間へと大幅に増加される。

しかし、このような授業時間数の増加や文字指導の導入により、小学校段階において英語嫌いになる子どもが増えてしまうのではないかということが危惧されている。よって、授業でのねらいを明確にし、指導の際に工夫や配慮をすることが必要であると考え。外

国語教育を通して育むコミュニケーション能力について、金森は「小学校段階で最も重視すべき基本的な資質は『態度・価値観』となるでしょう。コミュニケーションを楽しむ態度とともに、自ら学ぶ姿勢や、異文化への寛容な心・態度をはぐくむことが大切です」（岡、金森他 2012）と述べている。また、コミュニケーションを成立させるためには、他者と関わり合うことが不可欠である。外国語活動でも、コミュニケーションの良さを味わうために、児童が互いに学び合う場面が必要である。そこで、これから外国語を生涯にわたって学んでいく児童に対し、外国語を学ぶ楽しさを学び合う中で実感させ、今後の学びの基盤となる、主体的に学びに向かう姿勢を育成することが大切であると考えた。

研究の目的

本研究では、児童が主体的に学び合うことができるよう単元や題材を工夫することにより、児童が外国語を使えたという達成感を得て、主体的に学びに向かう姿勢が高まるか検証する。

研究の内容

1 主体的に学び合うことについて

小学校学習指導要領解説総則編には、「主体的な学びについて、「学ぶことに興味や関心を持ち、自己のキャリア形成の方向性と関連付けながら、見通しをもって粘り強く取り組み、自己の学習活動を振り返って次につなげる」（文部科学省 2017b）と示されている。そこで、本研究では、外国語活動で目指す児童の主体的に学びに向かう姿勢を「進んで外国語を活用すること」、「生活や次の学習にいかそうとすること」と捉えた。また、本研究での「学び合う」ことを、児童が「分かってほしい」、「外国語を使いたい」という気持ちを持った上で、児童同士で教え合ったり、助け合ったりしなが

1 逗子市立久木小学校
研究分野(授業改善推進研究 外国語)

ら、外国語によるコミュニケーション活動を行う学習と定義付けた。

2 現状の分析

(1) 所属校における外国語活動の取組

所属校では、より外国語に触れる機会を増やすために第1学年から第4学年まで、年間5時間程度ALTと共に、英語の絵本や歌等を用いて授業を行っている。第5・6学年の授業の中には、簡単な英語表現を繰り返し声に出して練習し、使用する授業や、指導者の話す英語を聞くことが活動の中心になり、児童が学んだ英語を表出する機会が少ない授業もある。それらの授業間において、学習内容の関連性や系統性があまり意識されていない様子が見受けられた。

(2) 児童の外国語活動の捉え方

所属校、第5学年の児童を対象に4件法のアンケートによる意識調査を行い、児童の実態を分析した(第1表)。

「外国語活動を楽しんでいるか」については、「そう思う」、「少しそう思う」と肯定的な回答をした割合は83%であり、8割以上の児童が外国語活動を楽しんでいることが分かった。しかし、その中で「そう思う」と回答した児童は51%に留まっていることも分かった。

さらに、「外国語活動を楽しんでいるか」と外国語活動で感じていることの相関関係を調べた。①の「題材」に関する項目及び、②～⑤の「外国語を使えたと感じること」に関する項目において「外国語活動を楽しんでいるか」の項目と比較的強い相関が見られた。つまり、授業の話題に興味・関心を持って取り組む児童や、英語を使えた達成感を得ている児童が、外国語活動を楽しんでいるといえる。

また、それぞれの問いに対して「そう思う」と回答した割合を見ると、①の「授業の話題が面白い」と感じている児童は32%であった。加えて、②～⑤の「外国語を使えたと感じること」に関する項目では、⑤の書くことに関する項目を除く、②～④の項目が35%程度であった。これは、単元の中の授業間の関連性が弱く、前時まで学んだことをいかして外国語を活用する場面があまりないことが一因でないかと考えた。

これらを踏まえ、題材と単元計画に関する授業の手

第1表 学習意識調査結果(N=100)

外国語活動で感じていること	そう思う (回答割合)	外国語活動を楽しんでいるかとの相関	
		相関係数	t値
① 授業の話題が面白い	32%	0.62	7.92 ***
② 英語を聞いて、意味が分かる	33%	0.59	7.33 ***
③ 英語の質問に、英語で答えることができる	34%	0.41	4.40 ***
④ 英語を読んで、意味が分かる	37%	0.40	3.31 ***
⑤ 英語を見ながら書ける	65%	0.33	4.50 ***
⑥ 友だちと一緒に活動している	64%	0.45	5.05 ***
⑦ 進んで英語の歌を歌ったり、英語の歌に合わせて踊ったりしている	47%	0.38	4.06 ***
⑧ 知らなかったことを知ることができる	42%	0.31	3.20 **
⑨ テストがないので、やる気が出ない	3%	-0.43	-4.66

4件法「1：そう思う、2：少しそう思う、3：あまり思わない、4：思わない」で回答。 ** $p < .01$ *** $p < .001$
※「1：そう思う」と回答した割合を示す。また、最右列のt値は相関係数の有意性の検定結果を示す。

立てを工夫することで、児童が外国語活動をより楽しいと感じ、主体的に学びに向かう姿勢を高めることができる考えた。

3 研究仮説

このような現状の分析から、本研究では次のような研究仮説を立てた。

題材の精選と、単元としてつながりのある指導計画を立案し、他者との関わり合いの中で外国語を活用する場面を繰り返し設定することで、児童が主体的に学び合うことができ、外国語を使えた達成感を得て、主体的に学びに向かう姿勢を高めることができるであろう。

4 授業設計の視点について

児童が主体的に学び合うことを通して、外国語を使えた達成感を得るためには、児童が単に表現のやり取りを行うのではなく、興味・関心を持ち、外国語を使いたいという気持ちを持った上で、抵抗感なく外国語を活用することができる授業づくりが必要であると考え、次の2つの視点で授業設計を行った。

(1) 題材精選について

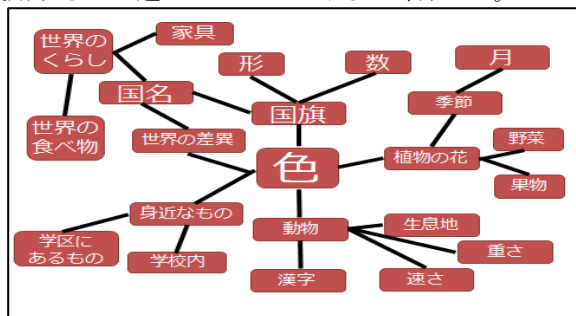
児童が「外国語で表現されたことを分かりたい」、「外国語を使いたい」という気持ちを持つるようになるためには、多くの児童が共通して学習内容に興味・関心を持つる題材を選ぶ必要がある。そこで、意外性等で知的好奇心を刺激し、興味・関心を高められるようにした。さらに、日常生活の中で見聞きしたことがあり、親しみやすいものを精選することで児童が活動に取り組みやすいように工夫した。

(2) 単元計画について

単元の中の授業間で関連性のあるテーマを扱い、学習内容につながりを持たせることで、同じ表現や語彙を繰り返し扱えるようにした。さらに、既習事項を振り返ることができる学習活動を毎時間設定した。また、初めは音声「聞くこと」を中心に、外国語の語彙や表現に慣れ親しませた上で、「話すこと」等の活用する場面を設定した。なお、新学習指導要領の内容に含まれる「読むこと」、「書くこと」に関する内容も児童の実態を考慮しながら扱った。

本研究では、テーマを中心とした活動案の作り方(小泉 2009)を参考に単元を計画した。まず、授業で扱う

テーマにつながりを持たせるためにブレインストーミングを活用した(第1図)。そして、それらのテーマを用いた活動が、対象の児童に触れさせたい英語表現を使用するのに適したテーマであるか吟味した。



第1図 ブレインストーミング例

5 検証方法

本研究では、先述の授業設計の視点に基づいて検証授業を実施し、授業前後のアンケート、各時間のワークシートと振り返りシートを用いて、研究の仮説について、次の4点の検証結果から分析し、考察した。

- ・ 題材の精選が有効であったか。
- ・ 単元計画が有効であったか。
- ・ 主体的に学び合うことができたか。
- ・ 児童が達成感を得ることができたか。

6 検証授業の概要

【実施期間】平成29年9月21日(木)～9月26日(火)

【対象】逗子市立久木小学校 第5学年2組 35名

【単元名】色と形

(各時間で扱った題材と授業の流れは第2表に示す)

【単元観】

「色」や「形」といった本単元で主に扱う語彙には、「オレンジ」や「ピンク」、「サークル」や「トライアングル」等、日常生活や他教科の学習の中で児童が聞いたことのあるものが含まれている。そのため、外国語学習の初期段階にある児童にとって身近で比較的理解しやすい語彙であると考えた。また、「スポーツ」や「遊具」のように多くの児童が好きなものや、「パンダ」や「オリンピック」等、話題性のあるものと関連付けることで、児童の興味・関心をより高めることができると考えた。

また、第1時に学習した「色」を、第2時に児童の興味付けを行いながら振り返る。その後、「色」から新出事項の「形」の学習に、つながりを持たせながら移行する。さらに、第3時の「国旗」の学習では、「国旗」の中にある「色」や「形」を扱うことで、本単元における学習内容を総合的に活用させる機会とした。児童が、単元を通して「色」と「形」の表現に慣れ親しみ、それらを使ったコミュニケーション活動を通し、外国語を学ぶ楽しさを実感できることを目指した。

第2表 各時間で扱った題材と授業の流れ

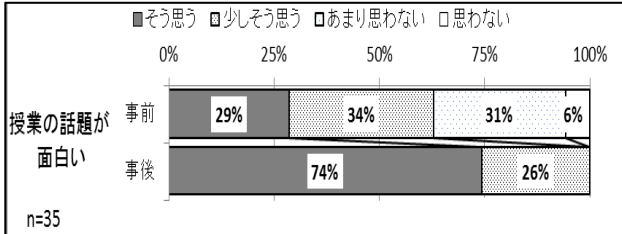
第1時	テーマ	色
	ねらい	身近にあるものや国ごとに差異のあるものの色に関する話を聞き、色を表す英語が分かる。
	授業の流れ	<ul style="list-style-type: none"> ・ 身近にあるもの <ul style="list-style-type: none"> 信号機、初心者マーク、二重の虹 オリンピックの旗、パンダの尾 ・ 国ごとに差異のあるもの <ul style="list-style-type: none"> ポスト、救急車 <p>・ 身近にあるもの・色を表す英語を聞き取る。(聞く)</p> <p>色カードを見て、色を表す英語を知る。ペアで相談しながら身近なものや、世界にあるものの色を考え、質問に答える。</p> <p>・ 色を表す英語を書き写す。(書く)</p> <p>絵や単語から、ものの色を考え、黒板に掲示されている色を表す英語を書き写す。</p> <p>・ 自分で探した色のものを伝え合う。(聞く)(話す)</p> <p>指定された色のものを見つけて児童同士で伝え合う。</p>
第2時	テーマ	形
	ねらい	身近にあるものの形に関する話を聞き、形を表す英語が分かる。
	授業の流れ	<ul style="list-style-type: none"> ・ 補色残像効果 ・ 身近にあるもの 校内のもの <p>・ 前時の学習を振り返る。 補色残像効果を使い、色を表す英語を振り返る。</p> <p>・ 身近にあるもの・形を表す英語を聞き取る。(聞く)</p> <p>色付きの形のカードを見て、色を表す英語を振り返り、形を表す英語を知る。</p> <p>・ 形を表す英語を書き写す。(書く)</p> <p>写真の中の形を見付け、英語を書き写す。</p> <p>・ 形を表す英語を読み取る。(読む)</p> <p>形を表す英語を読んで、写真の中から形を探す。</p> <p>・ 自分で探した形のものを伝え合う。(聞く)(話す)</p> <p>指定された形のものを見つけて児童同士で伝え合う。</p>
第3時	テーマ	国旗(色と形)
	ねらい	国旗の中の色と形に注目し、既習の色と形を表す英語を使ってクイズを作ったり解いたりして、児童同士で考えを伝え合おうとする。
	授業の流れ	<ul style="list-style-type: none"> ・ 色違いの国旗 <ul style="list-style-type: none"> バングラデシュ、パラオ、日本 ・ A L Tの出身国の国旗 <ul style="list-style-type: none"> イギリス <p>・ 前時までの振り返りを行う。 国旗やオリンピックの旗についての話を聞き、色と形を表す英語を振り返る。</p> <p>・ クイズ内の色と形を表す英語を聞き取る。(聞く)</p> <p>地図帳を用いて、指導者が作った国旗クイズを解く。</p> <p>・ 色と形を表す英語を書き写してクイズを作る。(書く)</p> <p>・ 自分で考えたクイズを使って伝え合う。(聞く)(話す)</p> <p>ペアで国旗クイズを作った後、グループ内で作成したクイズを出し合う。その後、個人でクイズを作成し、掲示して問題を解き合う。</p>

7 授業の手立ての有効性の分析と考察

(1) 題材精選について

題材を精選したことで児童が授業の内容に面白みを感じ、興味・関心が高まったかを調査した。

「授業の話題が面白い」と感じるかという質問に、事後調査では全ての児童が「そう思う」、「少しそう思う」と肯定的な回答をしており、検証授業前後で意識の変容が見られた。中でも、「そう思う」と回答した割合は29%から74%と大幅に増加していた(第2図)。



第2図 「授業の話題が面白いと思うか」の意識の変容

加えて、事後調査の自由記述には、35人中27人に題材に関する次のような記述が見られた。

- ・アメリカや違う国ではポストなどの色が違ってびっくりした。
- ・ハートの色が変るのが面白かった。
- ・パンダのしっぽが白いということを初めて知ることができて、とても面白かった。

さらに児童の記述内容を分析し、考察した。

どのような題材が多くの子の知的好奇心を刺激し、興味・関心を高めることに有効であったかを整理し、題材精選の視点として第3表にまとめた。

第3表 題材精選の視点

- ・驚きや、迷いが生じるもの
(パンダの尾の色が黒でなく、白いこと等)
- ・今、社会や児童の周囲で話題性があるもの
(パンダ、オリンピック、祭り)
- ・他教科や学校行事とつながりのあるもの
(色【図画工作】、形【算数】、国旗【社会】、林間学校等)
- ・英語の言語としての面白さを感じられるもの
(数字の8を意味する oct を含む単語 octopus, octagon)
- ・児童の身近なもの
(学校内にあるもの、先生に関すること)
- ・国際的な差異があるもの
(家、食事、救急車、ポスト)
- ・日常生活で英語の名前を見聞きしているもの
(色、形、食べ物、動物、家具等)

(2) 単元計画について

ア 外国語の活用に関して

学習内容につながりを持たせた単元計画を立て、他者との関わり合いの中で活用場面を繰り返し設定することにより、児童が外国語を使うことに関する意識に、どのような変容があったか調査した。毎時間行った伝え合う活動では、4人以上と伝え合うことができた児

童の割合は第1時26%、第2時42%、第3時94%と授業を重ねるごとに増加していった。また、第3時のクイズ作りでは、英語で書くことを絶対とせず、日本語で取り組んでもよいと指示をしたが、全体の86%の児童が前時までの学習をいかして全て英語で記述していた。また、第3時の振り返りシートの自由記述には次のような記述が見られた。

- ・平行四辺形のことを、2時間目では英語で言えなかったけど、3時間目の時は言えるようになった。
- ・1、2時間目に習った色や形のことをいかして3時間目にやれたので、とても良かったです。
- ・英語で書けるようになった色があった。前の授業の時より、ALTの先生の言っていることが分かるようになった。

これらのことから、学習内容につながりを持たせることで、児童が前時までに得た知識と関連付けて思考することができ、より語彙や表現に慣れ親しむことができたと考えられる。さらに、単元の中で間を置かず繰り返して活用場面を設定したことで、児童が学習した語彙や表現を忘れないうちに活用できたと考えられる。加えて、児童が能動的な活動自体にも慣れたことで、「できるかも」と思い、主体性を高めることにつながったと考える。

単元を通して学習内容につながりを持たせ、関連性を持たせることが、児童がより外国語に慣れ親しみ、活用しようと思える手立てとして有効であることが分かった。

イ 「書くこと」の扱い方

ワークシートの中で、児童が正しく英語を書き写せたかを分析した。第1時、第2時に比べて第3時の課題は難易度が上がっていたにも関わらず、色を表す英語を正しく書き写せた児童は、第1時は52%であったが、第3時は80%に増加した。しかし、形を表す英語を正しく書き写せた児童は、第2時は81%であったが、第3時は69%に減少した。形は色に比べて、英語での表現にあまり馴染みがなかったり、つづりが複雑であったり、国旗の中から形を認識するという課題自体が難しかったりしたことが理由として考えられる。

書き写す活動を行う際、見慣れない、聞き慣れない語彙を扱うことは児童にとって負荷が大きいものであった。児童の実態を正確に把握し、課題の選択、学習の進め方等を吟味しながら慎重に行う必要性を強く感じた。

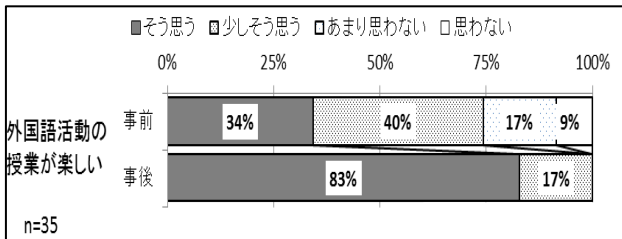
8 検証結果の分析と考察

(1) 主体的に学び合うことについて

題材の精選と単元計画の工夫という手立てにより、本章第1項で示した「主体的に学び合うこと」につながったかを次の3点で検証した。

ア 進んで外国語を活用していたか

授業前後のアンケート調査の「外国語活動が楽しい」という問いに対して、事後調査では全ての児童が「そう思う」、「少しそう思う」と肯定的な回答をしており、中でも、「そう思う」と回答した児童の割合が34%から83%に大幅に増加した(第3図)。

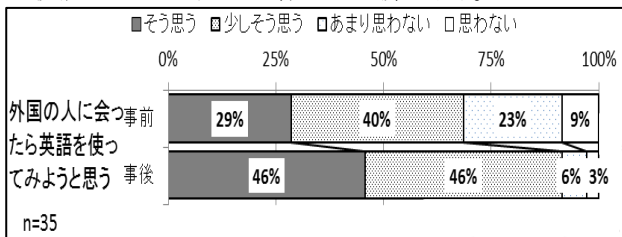


第3図 「授業が楽しいと感じるか」の意識の変容

また、本章第7項で示した通り、4人以上と英語で伝え合うことができていた児童の割合の増加により、外国語を活用する場面が増えたことから、積極的に外国語を活用する姿勢が高まったと考える。

イ 生活や次の学習にいかそうとしたか

「外国の人に会ったら英語を使ってみようと思う」という問いに対して、事前調査では「そう思う」、「少しそう思う」と肯定的な回答の割合は69%であったが、事後調査では92%まで増加した(第4図)。



第4図 「英語を使ってみようと思うか」の意識の変容

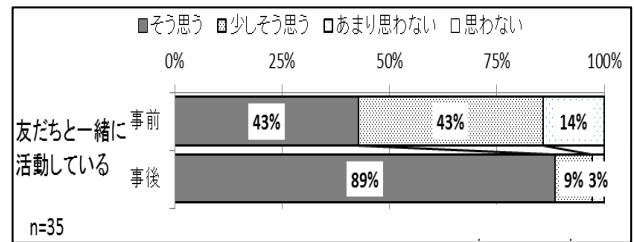
また、事後調査の自由記述には、次のように、英語をさらに使いたい、学んでいきたいという旨の記述が35人中22人に見られた。

- ・いろいろな色の英語の言い方を知れて良かったです。すごく楽しかったです。だから、日頃から色を英語で言ってみようと思います。
- ・家族や友だちと英語で話してみたいです。
- ・形や色で色々な国旗を表せることがすごいと思いました。今度、外国の知り合いに問題を出してみたいと思いました。

これらのことから、学んだことを使いたいという気持ちを持ち、次の学習や生活の中で、活用する場面をイメージし、いかそうとする児童が多く見られたと言える。

ウ 学び合うことができたか

授業の中で児童は友だちと一緒に活動し、学び合うことができていたかを調査した。以前から、授業では伝え合う活動や、グループ活動を取り入れていたが、事前調査に比べ、事後調査では、「外国語の授業で友だちと一緒に活動している」という問いに対して肯定的な回答の割合が大幅に増加している(第5図)。

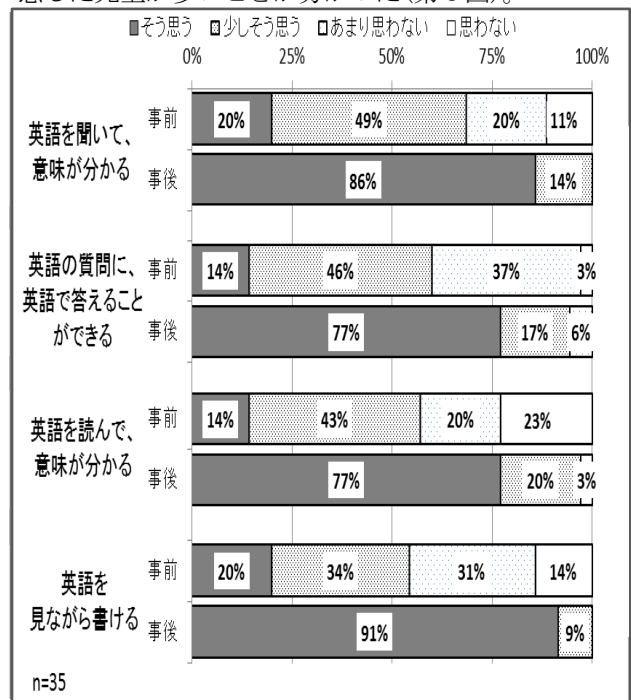


第5図 「友だちと活動しているか」の意識の変容

第1時や第2時の伝え合う活動や、第3時のクイズを出し合う活動の際、自分と他者の考えの違いに驚いたり、共感したりしながら行う様子が見られた。さらに、日常生活で得た既有的知識を用いて、言葉を加えながら自分の考えを伝えようとする姿が見られた。これらのことから、「外国語を使って伝えたい」、「相手の話を分かりたい」という気持ちを持ってコミュニケーション活動を行うことができたと考える。また、児童同士の中で自発的に他者をモデルにしたり、教え合ったりする姿が見られたことから、協力して取り組める課題を設定したことも児童の意識に大きな変容をもたらした一因であると考えた。

(2) 児童が達成感を得ることができたか

主体的に学び合うことを通して、児童が達成感を得ることができたかを調べた。授業で英語を使うことができたと思うかの調査では、「英語を聞いて、意味が分かる」、「英語の質問に、英語で答えることができる」、「英語を読んで、意味が分かる」、「英語を見ながら書ける」という「聞くこと」、「話すこと」、「読むこと」、「書くこと」に関する問いに対して、ほぼ全ての児童が肯定的な回答をしており、「できた」、「分かった」と感じた児童が多いことが分かった(第6図)。



第6図 「外国語を使えたと感じるか」の意識の変容

さらに、事後調査の自由記述には、「英語を使えたことで達成感を得ることができた」という旨の記述が、

36人中26人に見られ、主体的に学び合う中で、達成感を得られたと感じた児童が多くいることが分かった。

- ・形や色の名前を使って、国旗クイズが解けたり、自分でも作れるようになってうれしかったです。
- ・クイズを出し合う時に英語で話して伝わったので、とてもうれしかったです。
- ・色や形のことを言えたり書けたりできるようになって、話してみたら伝わったことがうれしかった。

一方、ワークシートや伝え合う活動の観察からは、英語を正確に使えていなかったり、戸惑いながらも活用できたりする様子が見られた。このように、正確性に課題は残るが、児童が「分かった気」、「使えた気」になることができ、達成感や満足感を得ることが、これからも外国語を学んでいきたいという、主体的に学びに向かう姿勢をより高めることにつながっていくと考える。

研究のまとめ

1 研究の成果

児童が主体的に学び合うための授業を設計する視点として、多くの児童の知的好奇心を刺激して、共通の興味・関心の持てる題材を精選することが「分かりたい」、「外国語を使いたい」という気持ちを持たせるといことにつながったと考えている。

さらに、単元の中の授業間で学習内容につながりを持たせた上で、児童が繰り返し語彙や表現に触れ、学習したことが「使えそう」と感じる活用場面を設定した単元計画を立てることが有効であった。

その結果、児童が主体的に学び合うことができ、外国語を使えたという達成感を得ることにつながり、児童の主体的な学びに向かう姿勢をより高めることができたと言える。

2 研究の課題と今後の展望

今回は、一単元での検証になったが、児童が、「また使ってみたい」、「次はできるようになりたい」と、外国語を主体的に学ぶ姿勢を高めていくためにも、本研究での授業設計の視点をういた外国語活動の単元計画を積み重ね、単元間でもつながりのある年間指導計画を作っていく必要がある。その中で、児童の「使えた気」を「使えた」へつなげていける手立ての研究を進めていきたい。

さらに、年間指導計画だけでなく、小学校第3学年から第6学年までの4年間を通じた系統性のある指導計画を立てていくことも必要であると考え。そうすることで、より適切に児童の発達段階に応じた指導を行うことにつながり、中学校との円滑な接続への手立ての一つになっていくと考える。そのためには、文部科学省より示されている「小学校外国語活動・外国語

研修ガイドブック」等を参考にし、校内研修等を通して学校全体として指導計画を作成することが必要であると考える。

また、児童が授業で外国語を活用するためには「何を」、「どのくらい」学ばなければならないのかを教員が正確に把握し、児童の実態に応じて授業を設計していく必要がある。そのため、新たに示される教材と本研究を関連させながら、新学習指導要領の内容に即した指導計画を立てていくことも必要だと考える。

おわりに

新学習指導要領実施に伴い、小学校では、外国語学習の教科化・早期化に対して不安を感じている教員も多い。しかし、今回の研究を通して、目を輝かせながら外国語での話を聞いたり、児童同士で関わり合う中で、コミュニケーションを楽しんだりしている様子が児童から感じられた。教員は児童のそのような姿を見ることで、自信を持って、外国語の授業を行うことができると考える。

本研究が、生涯にわたって外国語を学んでいくであろう児童が、「外国語を学ぶことが楽しい」と感じられるように、学校現場における授業づくりの一助となれば幸いである。

引用文献

- 文部科学省 2017a 『小学校学習指導要領解説外国語編』
http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afiedfile/2017/07/25/1387017_11_1.pdf (2017年12月取得)
- 文部科学省 2017b 『小学校学習指導要領解説総則編』
p. 77
http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afiedfile/2017/07/12/1387017_1_1.pdf (2017年12月取得)
- 岡秀夫・金森強編著 2012 『小学校外国語活動の進め方 「ことばの教育」として』成美堂 p. 27

参考文献

- 文部科学省 2015 『平成26年度小学校外国語活動実施状況調査の結果 [概要]』
http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/_icsFiles/afiedfile/2015/09/24/1362168_01.pdf (2017年12月取得)
- 小泉清裕 2009 『現場発！小学校英語』文溪堂 pp. 221-222